



西アフリカのダンスとジャンベを披露する子どもたち。この後、保護者たちと一緒に楽しんだ

思い付くまま書き連ねた。これにより子どもたちのカンボジアへの興味がわいたころ、筑波大学教育開発国際協力センターから、カンボジアの小学校との「インターネット交流会」の話が舞い込んできた。協力隊員が活動している小学校と美南ガ丘小学校のコンピュータ室とをインターネットで結び、ライブで子どもたちが交流するとう催しだ。2度にわたる交流で、子どもたちは質問と答えを交換し、相手を知るだけで

なく自分の国や暮らしについても振り返ることができた。その子どもたちは今、中学3年生になっている。

知ることって楽しい！

美南ガ丘小学校6年4組の子どもたちがアフリカを知ろうと思ったのは、昨年6月の修学旅行で東京の(財)日本ユニセフ協会を訪ねたのがきっかけだ。ユニセフ募金に協力していたけれど、そのお金は何に使われているのだろうという疑問を胸にやって来た彼らに、協会のスタッフはアフリカの話をしてくれた。子どもたちからアフリカについて知りたいという声が上がリ、2学期からの総合的な学習の時間でアフリカを取り上げることになった。まず実施したアンケートの結果は、

アフリカがどこにあるか知っている人 31人中7人。アフリカはアフリカという国だと思っていた人 多数。アフリカのイメージは 暑そう、貧しい、怖い、など。アフリカに行ってみたい人 17人。子どもたちはグループに分かれ、インターネットでアフリカについて調べ始めた。そんな中、JICA駒ヶ根で開催されたアフリカ・キャラバ

ンに足を運んだ中山さんは、長野県の各地に拠点置いて活動しているsabbunumaというグループと出会う。それはジャンベとダンスを通して、西アフリカの音楽を伝えようとしている人々だった。

「ジャンベとダンスと一緒にやらせてもらったとき、理屈じゃなく楽しかったんです。これだ！と思って、学校に来てもらいました。子どもたちは初めてのアフリカのリズムにどう反応するのか。中山さんの心配をよそに、引込み思案な子どもまで楽しそうに踊っていた。さらに、子どもたちが見つけた「ニューイヤール・アフリカ」という長野市でのイベントに、クラスの有志11人と中山さんが参加、そこでもジャンベとダンスを習って仲間に伝えていった。

「自分の範囲を超えるものに出会ったり、違う世界を知る



ダンスとジャンベを披露する前に、グループで調べたことを発表した

ことで、身の回りで起きているつまらないことが、ちつぽけなものに思えてくる。今、この場で答えが見つからなくても、10年、20年たつてふと思いつき、何が行動してもらえたらいいですね」

ジャンベとダンスの発表を終えた子どもたちに聞いてみた。「アフリカに行ってみたい人！」

「ハイ!!」

全員の声が体育館にこだました。

官民が連携してアフリカの理解を深め支援の輪を広げる「アフリカ2008キャンペーン」の関連イベント。「アフリカ人 日本人 みんな地球人」をテーマに国内5カ所で行われ、1回目は2007年9月29日にJICA駒ヶ根で開催。



世界とつながる教室

JICAの開発教育支援

このコーナーでは、各地の教育委員会や学校、NGOなどによる開発教育・国際理解教育の実践・普及を支援するJICAのさまざまな取り組みを紹介します。

第12回

協力隊の経験生かし、子どもたちと異文化を知る

「現職教員特別参加制度」で青年海外協力隊に参加した中山晴美さんは、総合的な学習の時間などを利用して、任地カンボジアの話を子どもたちに聞かせてきた。異文化への扉を開いた子どもたちは、今度は自らアフリカを知ろうと動き始めた。「これをきっかけに、将来何かの行動に移してくれれば」と中山さんは願っている。

国立大学付属学校および公立学校の教員が身分を保持したまま青年海外協力隊へ参加するための制度。年度末の3月に帰国できるなど、現職の教員が参加しやすいよう配慮されている。



カンボジア・シエムリアップの中学校で体育の指導をする中山さん(後列中央)

雪も溶かすアフリカのリズム

「ダン、ダダン、ダン、ドコドコドコ...」

2月中旬、雪合戦の跡が残る校庭に、熱気あふれるアフリカのリズムが流れてくる。音の主は、長野県小諸市立美南ガ丘小学校6年4組の子ど

もたちだ。卒業式を翌月に控えたこの日、授業参観のため体育館に集まった保護者らに、西アフリカの踊りとジャンベ(太鼓)を披露している。アフリカ風のそよ風の衣装をまとい、ずらつと並んでジャンベをたく姿は壮観だ。その前で、はだしの子どもたちが全身を使って飛び跳ねる。そんな生徒たちを見守りながら3つの太鼓を夢中で操るのは、青年海外協力隊OGの中山晴美教諭だ。

中山さんは、「現職教員特別参加制度」ができた2002年、カンボジア・シエムリアップの中学校へ体育の教員として派遣された。帰国後は協力隊のネットワークを生かし、子どもたちと一緒にアジアや

長野県小諸市立美南ガ丘小学校教諭
中山晴美さん



アフリカを知る活動を続けている。

協力隊に応募したのは、「子どもたちに自分で体験したことを伝えたい」とから。実際、任地では発見の連続で、日本に帰ったら伝えようと思うことがいくつもあった。だが、すぐに復帰した小学校では日々の業務に追われ、気が付くと1学期が終わろうとしていた。そこで思い付いたのが壁新聞。「カンボジア便り」と名付けた新聞には、カンボジアの学校や子どもたちの生活について、伝えたいことを

カンボジアとのインターネット交流会に臨む子どもたち。カンボジアの子どもたちから相手をいたわる言葉を教えてもらい、感動しきりだった